

クロソイ放流技術開発調査 (抄 録)

山内 高博・山田 嘉暢

1. 市 場 調 査

(1) 平成6年の漁獲実態

- 1) 脇野沢村漁協と大戸瀬漁協の昭和61年から平成6年までの月別漁法別銘柄別漁獲量を調べた。
- 2) 脇野沢村漁協は平成4年までは増加傾向にあったが、その後減少し平成6年には、3,026kgと前年よりも359kg減となった。大戸瀬漁協は年々増加傾向を示し、平成6年には昭和61年以降最も多い27.1tとなった。
- 3) 漁法別漁獲量では、これまで通り両漁協とも底建網を主体とした小型定置が最も多かった。

(2) 放流魚の再捕状況及び放流効果

[脇野沢村漁協]

- 1) 平成4年7月から5年6月に漁獲されたクロソイの銘柄別年齢組成を調べた。その結果、銘柄「大」は3才魚以上が67.4%を占めていたが、銘柄「中～コミ2」はほとんどが1～2才魚で占められていた。
- 2) 平成5年7月から6年6月に漁獲されたクロソイの漁獲量・漁獲金額・漁獲尾数別銘柄組成及び銘柄別放流魚混獲状況を調べた。その結果、銘柄「大」「中」の占める割合は漁獲量で49.1%、漁獲金額で59.0%であったが、漁獲尾数では24.1%と少なく、7割強が「コミ1」「コミ2」で占められていた。
- 3) 同期間に漁獲された放流魚の漁獲量、漁獲金額はそれぞれ210.6kg、169千円で全体の7.6%を占めた。
- 4) 平成2～5年放流群の平成6年6月までの累積再捕率(実数)は、それぞれ1.58、6.93、1.05、0%であり、平成3年放流群が最も高く、前年の調査に比べ3.01%増加した。

[大戸瀬漁協]

- 1) 平成4年5月から5年12月に漁獲されたクロソイの銘柄別年齢組成を調べた。その結果、銘柄「大大」には4才魚以上が83.4%を占めていたが、銘柄「小ガサ」には1才魚が94.0%を占めていた。
- 2) 平成5年7月から6年6月に漁獲されたクロソイの漁獲量・漁獲金額・漁獲尾数別銘柄組成及び銘柄別放流魚混獲状況を調べた。その結果、銘柄「大大」「大」の占める割合は漁獲量で55.3%、漁獲金額では65.9%であったが、漁獲尾数では20.6%と少なく約8割が「小」「小ガサ」で占められていた。
- 3) 同期間の漁獲された放流魚の漁獲量、漁獲金額はそれぞれ1,259.9kg、720千円で全体の15.9%

を占めた。

- 4) 平成2～5年放流群の平成6年6月までの累積再捕率(実数)は、それぞれ0.15、2.41、1.33、0%であり、平成3年放流群が最も高く、前年の調査に比べ0.98%増加した。

2. 追跡調査

- 1) 脇野沢村地先において放流サイズの違いによる放流後の分散状況、生残率等を調査した。
- 2) 放流日は平成6年10月18日で、大型群(TL=100.6±9.6mm; 38,710尾)及び小型群(TL=78.8±12.2mm; 52,474尾)を牛の首地先、水深5mに放流した。
- 3) 追跡調査は、放流点を中心に半径400mの範囲にアイナメ籠を合計10点(50籠)設置し、放流後1～96日間で計7回行った。
- 4) 大型群及び小型群ともに水深5m帯で約7割が再捕され放流点付近に滞留する傾向がみられた。
- 5) 但し、大型群は放流9日後に放流点から5km離れた水深50mで1尾ではあるが再捕され、分散範囲の広さが示唆された。
- 6) 1日当たりの生残率は、大型群が96.3%、小型群が98.2%となり、小型群が高い値を示した。但し、これは分散による減少も含まれ、大型群の方が分散の程度が大きいものと推察された。